

E-1 児童の年齢変化に伴う子供の機能の変化について
——その1. 児童と母親の意見を通じて——
関西大学工学部 ○山本昌子 高橋昭子

目的. 近年の児童の生活の室内化傾向は、住宅計画の面からも再考される必要がある。私達の行った調査研究においても、上記傾向が確かめられ、子供の質(専有共有別)が児童の室内生活行為に影響を与えている事が若干明らかとなった。そこで、今回は、さらに、児童の室内生活の拠拠ともいふべき子供室に焦点をあて、児童の年齢変化に伴って、どのような機能が必要となるのかを明らかにする事を主な目的とした調査研究を行った。その1では、子供室に関する児童と母親の意見を通じての分析を報告する。主な分析項目は、①子供室に対する不満、②現住家で子供室として使用したい部屋とその理由、③理想の子供室(及び専有室)所有時期と広さ、④子供室の機能について、等である。(⑤以下、児童、母親両者の意見)

調査対象の選定と方法については、その2で報告する。

調査結果の概要 児童の子割が、子供室に対して何らかの不満を持っており、その内容は「狭い」がオ1で、特に高校生に高い。使用したい部屋として、小学生では、日当り明るく広さを理由に、開放的な南面6帖の選択傾向がみられるのに対し、高校生の約半数はプライバシー保護の理由で、北側4.5帖を選ぶ傾向がある。子供室の機能については、各学年を通じ、まず勉強がオ1であるが、次に、小学生では、収納保管や遊びが続く、中高校生では、休息と睡眠が続く。かつ「プライバシーの保護」に対して、小低学年は非常に少なく、年齢増に伴い次第に高くなり、高校生は約半数を占める。しかし、中学生と高校生との間の差が顕著である。これら児童の意見と母親の意見のつれも、若干確認されている。